

タンポポの世界で今何かが

長 井 真 隆

激しく降り積もった雪が春とともにとけだすと、雪の下から倒れた枯れ草まじりの地面が見えてきます。そして一陣の春風にさそわれて土のかがおりが漂います。小さな微生物や野草が長い間雪の下で生き続けていた香りなのです。

陽気が増すにつれて、野辺の一本道や空地にも舗装道路の街路樹の土のたまりにも春の小さな使者が目立ちます。タンポポもその一つです。タンポポは昔から春の使者とされていましたが、このごろでは夏でも秋でも花を咲かせるタンポポが現われてきました。そのへんの事情は一体どうなっているのでしょうか。

タンポポの名前は

「タンポポ」軽快で口ずさみやすい名前です。この名前は、どこからついたのでしょうか。「田菜ほほ」から名づけられたという見方があります。タンポポの古い名前を田菜といい、田畑の近くに生えている菜という意味です。昔、食用になる野草を菜といいました。ほほというのは、綿毛のついた実が、花の終わったあとにほおけるように開く様子を表わしています。このことから田菜ほほ、それがやがてタンポポに変わりました。

ほかにもう一つの見方があります。刀の手入れをするとき「たんぼ」を使います。綿を布で包んでまるめてあります。タンポポの綿毛のまるい穂は、それと大変よく似ています。それで、たんぼのような穂という意味でタンポポの名前がつきました。どの見方が正しいかわかりませんが、いずれもタンポポの特徴をよくとらえています。

タンポポを見分けよう

一口にタンポポといっても、いろいろな種類があって、見分け方もやっかいです。1本の株だけをみても、葉の切れ込みぐあいに違いがあったり花を形づくっている部分の大きさもまちまちです。それで、ある時期に、日本のタンポポが200種類にも分けられたことがあります。その後、研究が進み、現在20程程度にまとめられています。

富山県の平地と山地には、その内、セイヨウタンポポ・エゾタンポポ・セイタカタンポポ・クシバタンポポ・シロバナタンポポの5種類が分布しています。更に、研究が進むとあと1種みつかる可能性もあります。

タンポポを見分ける第1の目のつけどころは、



図1 タンポポは「たんぼ」から名づけられたそうじゃ

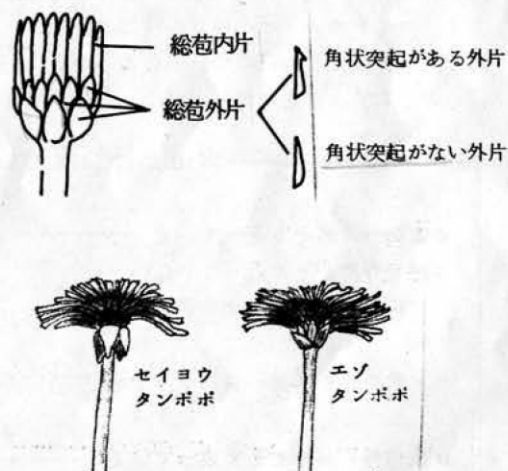


図2 タンポポの総苞(上図)。セイヨウタンポポとエゾタンポポの違い(下図)

花を包んでいるがくのような形をした総苞です。総苞の1枚1枚を総苞片と呼びます。総苞片は、外側の片と内側の片からなっていて、それぞれを総苞外片、総苞内片といいます。外片は1枚1枚はがれますが、内片は下部で互にくっついていきます。

タンポポを見分けるには、まず、外片が大きく外へそり返っているかいないかを見ます。そり返っていればセイヨウタンポポで、そり返っていないければ日本のタンポポです。県内のタンポポは、ほとんどセイヨウタンポポです。

そり返っていないタンポポがみつかったら、次に外片の先端の外側に角があるかないかを見ます。角を角状突起と呼んでいますが、これがなければエゾタンポポです。エゾタンポポは、北海道・東北・北陸の平地に生活しているタンポポです。県内では、宮崎・石田などの海岸道路や山田・五箇山などの山間部でわずかに見られます。また、富山市の新庄や老田にも生えています。

エゾタンポポのように角状突起がなくて、葉の切れ込みの深いものをクシバタンポポといいますが、この区別は大変むずかしいとされています。クシバタンポポは、県内では極めて珍しく、呉羽など限られたところだけに生育しています。

角状突起がなくて、総苞外片がエゾタンポポのおむすび形よりやや長い円状をしていればセイタカタンポポです。セイタカタンポポの外片には、時々小さい角状突起がついていることもあります。セイタカタンポポの見かけ上の特徴は、背高といわれるように花のついている茎が、うんと長いことです。普通のタンポポは、人が草刈りな

どをして手入れの行き届いたところで生活していますが、セイタカタンポポは、やや手入れの行き届かない草の茂るところでも生活します。花茎や葉を上へ伸ばす性質を持っているので、他の草との共存が可能なのでしょう。県内では、おもに宇奈月・五箇山・山田などの山間部で見られます。

角状突起が大きく、外片がややそり返り、白い花であれば、シロバナタンポポです。シロバナタンポポは、暖地性のもので中国・四国・九州方面に多く見られます。県内では、高岡・伏木・富山・石田などの一部でみられます。富山県が北限だと考えていましたが、昨年新潟県糸魚川市東海にも分布していることを確認しました。

激動するタンポポの世界

セイヨウタンポポが日本に渡来した年ははっきりしていませんが、明治の初めまたは中頃といわれています。昭和の初め頃、東京では珍しい植物の一つでしたが、今では全国いたる所に勢力をのばしています。それとは反対に、関東地方に分布していた在来のカントウタンポポが近年急激に減少しました。この原因は何でしょうか。

このことについて多くの方の研究がありますが、まだ結論はでていません。その中からいくつかを紹介しましょう。セイヨウタンポポは、3倍体タンポポといって、無配生殖をします。無配生殖というのは、受粉しなくても実を結び子孫を残す生殖の仕方をいいます。大変珍しいように思われますが世界のタンポポのほとんどがこのタイプです。日本のタンポポのエゾタンポポ・シロバナタンポポも無配生殖をします。これに対して、受粉

富山県に分布しているタンポポの見分け方

- 総苞外片がそり返っている セイヨウタンポポ
- 総苞外片がそり返っていない
 - ・ 総苞外片がおむすび形をしている 角状突起がない エゾタンポポ
 - 葉の切れ込みが細かくて深い クシバタンポポ
 - ・ 総苞外片が長いおむすび形をしている 角状突起がないか、または小さい角状突起がある
 - 花の茎が長い セイタカタンポポ
- 総苞外片がややそり返っている 角状突起が大きい
 - 花は白い シロバナタンポポ

しないと実を結ばない、つまり有性生殖をするタンポポがいます。この種のタンポポは世界でも種類が少なく、むしろ日本に多いのです。カントウタンポポ・カンサイタンポポ・セイタカタンポポなどはこの仲間で、これを2倍体タンポポといいます。

さて、カントウタンポポは、有性生殖でふえるわけですが、自家受粉をきらうので、近くに仲間のタンポポがいないと受粉して子孫を残すことができません。一方、セイヨウタンポポは、無配生殖ですから近くに仲間のセイヨウタンポポがいなくても、自分だけの力で実を結び子孫をふやすことができます。このような両者の違いが、セイヨウタンポポの分布を広めた一つの原因と考えられます。しかし、このことがカントウタンポポの減少の原因になるかどうかは、まだはっきりしていません。

ところで、富山県内のタンポポの世界は、どうなっているのでしょうか。県内のタンポポの分布についての研究は、あまり行われていないので、はっきりしたことはいえませんが、数少ない在来日本タンポポは、減ることがあってもふえていくことはないようです。私の知っている限りでは、ここ20年あまりセイタカタンポポは山間部の古い道路で、エゾタンポポは、海岸や町の古い道路や庭の片隅でじっとしているようで、新しい土地への侵入はほとんど見られません。

一方、外来のセイヨウタンポポは、新しくできた道路の路肩や空地などへ大変な勢いで侵入しています。セイヨウタンポポは、土地が新しく造り変えられたところを好むようです。セイヨウタンポポはエゾタンポポと同じように無配生殖をするのに、セイヨウタンポポだけがめざましく進出するのはなぜでしょうか。セイヨウタンポポには、それなりの優れた性質があるようです。

エゾタンポポは、春から夏にかけて花をつけますが、これに対して、セイヨウタンポポは、春から秋にかけて、何回も花をつけます。去年のように暖かい年では12月31日になっても花をつけていました。1年中、花を咲かせ実を結ぶセイヨウタンポポの方は、繁殖能力がはるかに優れているといえるでしょう。

このほかにも、セイヨウタンポポの優れている



図4 シロバナタンポポ

点がいづつか報告されています。日本のタンポポの種子は、長い間休眠するのに、セイヨウタンポポは2週間ほどで発芽するとか、発芽してから花をつけるまで、1年もかからないということなどです。

性質の似た植物は、お互いによく似た土地で生活しようとしします。このような窓から日本のタンポポとセイヨウタンポポを見ると、以上お話しすることがらは、いずれもセイヨウタンポポの分布の拡大に有利にはたらくものと考えられます。このほかに日本のタンポポが減っていく原因として、道路舗装などによって土壌がアルカリ性に変化したからだという考え方もあります。

今、日本のタンポポの世界は、激しく動いています。しかし、その原因はまだはっきりつかめていません。私たちのまわりのタンポポの世界は、どのように動いているのでしょうか。また、そこにはどんな秩序があるのでしょうか。観察の地点を決めて、計画的に観察してみませんか。

参考文献

- | | | |
|------|-----------------------------|---|
| 長田武正 | 人里の植物 I | 保育社 |
| 森田竜義 | 日本産タンポポ
属の2倍体と倍
数体の分布 | 国立科学博物館
研究報告口
シリーズB
No. 1.2, No. 1
1976 |

<ながい しんりゅう：企画担当主幹>